



第3回

人類と本能から見てみる～狩猟型と農耕型～

皆さんこんにちは。“小牧でより質の高い就活ができるように”という目的でコラムを始めることになりました、キャリアコンサルタントの長谷川といたします。

——前段——

前回のコラムでは、自分の得意なことを探すことの重要性をお伝えしました。今回のコラムでは、自分の得意なことが何か、アプローチを変えて探ってみたいと思います。

——歴史を振り返る——

人類の祖先はおよそ700万年前にアフリカに誕生したといわれています。そこから現在まで進化と淘汰を繰り返し現在のような人間の姿に至ったわけです。さて、我々は700万年前の祖先と別物になったのでしょうか？あるいは1万年前とは？3000年前とは？明確な答えはありません。ただ少なくとも、その名残を我々は残しているのは事実です。尾てい骨や親知らずなどはその当時の名残として語られます。急に歴史の話になりました(笑)。ここで言いたいことは**過去は現在と密接につながっていて、延長線上に我々がいます**。そこには我々が生きる上でのヒントがあり、共通点があるのです。

——シンプルにとらえる——

では現代に生きる我々が何をヒントにするべきでしょうか？それは「**シンプルに物事をとらえる**」、ということです。

現代社会は、近代の産業革命以後様々な技術が発展しており、機械が代わりに作業を請け負うことが多岐に渡り広がってきました。結果として人間は「機械だけでは完了できない」ことを仕事として請け負う事にフォーカスをしています。それ故に機械の作業と人間の作業が非常に複雑に入り組んでおり、組織を外観すると、そこに入って自分に何ができるのかが不明瞭に思えることがあるのです。

しかしふと考えるとその実体は、例えば3000年前の**縄文時代と違いはない**のではないのでしょうか？

——狩猟型と農耕型——

世界には多種多様な人種が生きていますが、「同じ人間」とはいつでもその特徴は違うのです。肌の色も、目の色も、身体能力も、性格も、その地域に合わせて進化を遂げているのです。その中でも「**狩猟民族**」と「**農耕民族**」という区分があります。

「**狩猟民族**」はかつてのゲルマン諸国やアフリカなど広大な土地で生活をしていました。その広大さから各地で獲物が少なくなっても移動しながら生活の糧を得ることができたため、その狩猟方法をベースとして、森や平原、海などを駆け巡りました。その結果狩猟のため徐々に武器が発達して、武器を操る能力が高い戦士が誕生し、結果として**瞬発性のある・個人の力を重要視する風土**が生まれていきました。

対して日本は島国、そして山や川の多い地形という特性により、定住し作物を育てることに特化した「**農耕民族**」として知られています（議論はあると思いますがここではそのようにとらえます）。

村をつくり、年間を通して計画を立て、共同作業を行いながら生活の糧を得てきました。その結果**協調性を重要視する・計画性を重視するなどの風土**が生まれました。

そして同じ民族の中でも役割分担や工程が存在します。

狩猟民族なら、獲物を捕る人・皮をはぐ人・天日に干す人・武器を作る人 etc...

農耕民族なら、田を作る人・耕す人・水をくむ人・苗を育てる人・脱穀するひと etc...

それぞれの目的に合わせて実に多種多様な役割が生まれてきました。

——あなたはどうですか？——

ここで問いかけたいこと。

あなたがもし縄文時代に生きていたら、果たしてどのような役割をする（したい）でしょうか？

リスクがあっても前面に立つ戦士でしょうか？戦士を弓でサポートする後方部隊でしょうか？そのための鋭利な武器を作る鍛冶屋でしょうか？あるいは獲物をキレイに処理する肉屋さんでしょうか？作物を取るための土壌を整える係でしょうか？必要な管理をする人でしょうか？刈り取りをする人でしょうか？刈り取った作物を保管する係でしょうか？ etc...

これらの質問の役割は今は機械化が進み、あるいは分業化が進み、行わなくなったものもありますね。でも**その本質は現代の仕事における役割と似ています。**

チームワーク	■A：個の力を押し出す(一人で行う) B：和の力を押し出す(チームで行う)
コミュニケーション	■A：前面に出る(顧客と直接) B：後ろでサポートする(間接業務)
創造性	■A：工程の上流(企画) B：工程の下流(実務)
肉体労働or頭脳労働	■A：身体を使う B：頭を使う
負荷	■A：リスクの高い(or困難な)役割 B：リスクの低い(or比較的楽な)役割

書き方に語弊があるかもしれませんが、これは良し悪しを伝えたいものではありません。

考えたいのは、**あなたが得意とする仕事の区分**の問題なのです。自分の得意・不得意とすることや向き・不向きを考慮して、できる限り自分が自信をもって楽しくできる仕事に向かうため、就くべき仕事を仕分けます。

「チームワークを取るのが苦手」なのであれば、自分一人で回せる仕事はどうでしょう？
「お客様とのコミュニケーションが苦手」なのであれば、後ろで支えてあげるのはどうでしょう？
「物事を企画するのが苦手」なのであれば、企画実現のための実際の作業をするのはどうでしょう？

苦手なことを克服する、というのも一つのやり方です。がしかし、**自分の立ち位置と得意なことを認識しそこに力を注ぐ**『選択と集中』の考え方は、あなたの職業人生を豊かにしてくれるはずです。ぜひ自分がどんな民族でどんな役割なら得意とできそうか、自分を「空想」してみてください。

(公開日:2021.6.28)

執筆者：(株)QuaLim 代表取締役 長谷川 卓也

経歴・専門

1983年生まれの小牧市育ち。南山大学法学部卒。国家キャリアコンサルタント。車載機器メーカーでの海外営業勤務を経て、2019年より(株)QuaLim代表取締役。化粧品小売経営と職業紹介事業を行う。経営者との兼任は珍しく、業界団体唯一の認定キャリアコンサルタント兼経営コンサルタント。大学卒業を前に「やりたい仕事」がわからず留年。苦い経験を振り返り「自分の適性を見極めて適切な仕事を教えてくれる人」がいたら良かったのに、と思ったのにいないので自分がやるしかないといこの業界に入った。



※当内容は執筆者による見解を述べたものであり、記事や情報の内容に関しては十分な注意を払っておりますが、それらについての正確性や確実性、効果などを保証するものではありません。予めご了承ください。
※当記事の内容を含めた「就職または就職・活動」に関する質問事項がございましたら本サイトお問い合わせよりご連絡下さい。